

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：日本の伝統文化にふれよう

事業者名：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

住所：東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-1829

FAX：03-5273-4398

HPアドレス：<http://www.waseda.jp/enpaku/>



連携事業者名：新宿区教育委員会

会場：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

事業期間：平成21年7月1日～平成22年1月29日

1. 館の使命と本事業の関係

演劇博物館は、昭和3年10月、日本近代演劇の祖ともいべき坪内逍遙博士の古稀（70歳）と、逍遙がその半生を傾注した「シェークスピア全集」全40巻の翻訳が完成したことを記念して、各界有志の協賛により設立された。世界の演劇を比較研究し、演劇文化の向上発展を通じて世界文化に貢献することが当館設立の目的である。日本で唯一の演劇専門の博物館として、また、学校法人のもとに設置された博物館として、持てる資源を最大限に活用して、これからの日本を担う小中学生の、日本の伝統文化の理解促進に寄与することは、演劇研究を通じて世界文化に貢献するという当館の使命を全うするための礎である。

2. 企画内容

①事業目的

小中学生にとって身近な家庭演劇や学校演劇などの分野に加え、能、文楽、歌舞伎など日本の古典演劇や地域の伝統芸能に対する関心を深めることができるように、小中学生向けの冊子を作成し、伝統芸能を実際に体験する場を設ける。また、学校法人が設置する博物館機能のなかでも、特に地域社会に根ざした教育機関としての機能を向上させる為に、当館の収蔵品、研究成果を地域の小中学生にわかりやすく紹介できるボランティアを育成する。

②事業概要

演劇博物館の収蔵品や実際の舞台の写真などを用いて、古代から現代まで生きる日本の演劇の歴史を小中学生にわかりやすく紹介する冊子を作成する。その冊子を使って、小中学生に対して日本の演劇の歴史を解説できるボランティアの育成講座を設ける。また、地域の小中学生、教員に参加を呼びかけ、日本の伝統芸能を参加者自身が体験し学ぶ機会を設ける。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

以下の3点を中心に事業を進めた。

①小中学生向け冊子の作成 (7月～11月)

本館所属の研究者・学芸員とともに、対象となる小中学生の現状や利用者の視点を取り入れるため、新宿区教育委員会と双柿会に対して編集委員としての協力を要請し、企画を進めた。また、原稿の執筆者は、若手の研究者を中心とした。

本館が所蔵する資料に加え、実際に上演された舞台の写真も多く掲載し、この冊子をきっかけに、実際の舞台に興味を持ってもらえるように工夫した。また、歴史や伝統文化に興味がある生徒も、それ程興味がない生徒も、飽きないようにする配慮から、文章での説明は最小限に止め、写真で見てわかりやすい構成を心がけた。このように視覚に訴える誌面構成が可能となったのは、資料写真を提供していただいた機関のご協力によるものであり、謝意を表したい。

なお、この冊子は、新宿区教育委員会の協力のもと、新宿区立の小中学校、養護学校に在籍する小学五年生から中学三年生までの全ての児童・生徒に配布した。また、希望する来館者にも配布した。



冊子「日本の伝統文化にふれよう」

②演劇レクチャーガイド養成講座 (11月～12月)

「演劇博物館とは?」「ボランティアとしての心構え」「日本の演劇一(中世～近世)」「日本の演劇二(近代～現代)」の四回の講座を開催した。

①で作成した冊子をテキストとし、日本の伝統文化を小中学生にわかりやすく解説するための知識を学ぶ講座に加え、「ボランティアとしての心構え」の回では、小中学生の現状および小中学生に接する際の姿勢という地域の活動にも活かせるテーマを設け、広く聴講者を募った。



演劇レクチャーガイド養成講座

③伝統芸能体験ワークショップ (12月23日)

歌舞伎と縁の深い常磐津の太夫と三味線奏者、狂言の役者を講師として、日本の伝統芸能の所作や発声を地域の小中学生が体験し、本館が展示する日本の伝統芸能に関する資料の解説を受けることが出来る講座を実施した。

三味線の演奏にあわせての常磐津ならではの発声や、狂言ならではの滑稽さを活かした動作と発声を同時に行うことなど、今まで体験することが少なかったことだか



伝統芸能体験ワークショップ(常磐津の実演)

からこそ、多くの参加者が楽しく体験できたようである。

また、実際に演じる側からの解説という小中学校の授業ではなかなか体験できない手法で展示資料の解説を体験することが出来たことも、参加者の関心を引くことにつながった。



伝統芸能体験ワークショップ（狂言の実演）

（２）参加者の数

参加者人数 延べ 207 人

内 訳：

○演劇レクチャーガイド養成講座

一般：延べ 169 名

○伝統芸能体験ワークショップ

幼児：1 名 小学生：11 名 中学生：14 名 保護者：8 名 一般：4 名

（３）事業により作成した印刷物等

○冊子「日本の伝統文化にふれよう」

（４）実施事業に関する新聞記事等

○テレビ、関連誌等

「シェイクスピアの海へ」オセロ特集

Shakespeare Company Journal Vol. 1 「書籍紹介」ページ

シェイクスピア・カンパニー 平成 22 年 4 月 23 日発行

「日本の伝統文化にふれよう」

（早稲田大学坪内逍遙博士記念演劇博物館）2009 年発行

博物館来館者に無料配布

早稲田大学の演劇博物館から、小中学生への日本の伝統文化普及事業（文化庁支援）のために発行された冊子。見開き 1 ページずつ能、狂言、歌舞伎などの説明があり、「シェイクスピア」のページではなんと、現代においては蜷川幸雄氏を最も有名な演出家として紹介した後、同じ面積を裂いてカンパニーに触れ「東北弁の台本に書き換えるという斬新な発想／原作を下館氏のオリジナル作品に仕上げている／まさにイギリスのシェイクスピアが日本化した姿」と記述されています。

そしてさらなるご縁で、2010 年 6 月 19 日（土）には早稲田の大隈講堂で「破無礼」公演が実現することになりました。身に余るオファーの連続に、一同感謝に堪えません。

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

①小中学生向け冊子の作成に関して

体系的な冊子を作成したことで、一過性の事業とならず、日本の伝統文化に関して、小中学生をはじめとする初学者にもわかりやすいテキストを残すことが出来た。

冊子に掲載する資料写真に関して、国立劇場や宮内庁をはじめ、本館以外の日本の伝統文化に関わる機関にも協力を求めた結果、掲載する資料写真の充実が図れたことに加え、本館以外の機関でも、この冊子を活用するために資料閲覧室に配架するなど、この事業の成果を本館以外の機関にも広めることが出来た。

また、文化庁による公的な事業ということで、資料写真の掲載に関して文楽、歌舞伎の舞台俳優の肖像権に関わる費用以外は、全て無償で協力を得ることが出来た。

②演劇レクチャーガイド養成講座に関して

本館では、来館者に対して展示解説を担当するボランティア組織があり、小中学生に対して解説するための講座の受講者は、この組織のメンバーが中心となった。講師は、原則として、今回の事業で作成した冊子の編集委員、または執筆者が務め、冊子で紹介したテーマの表面的な知識だけではなく、実際に、来館者に解説する上で必要となる背景まで講座に盛り込むことが出来た。

平日に開催したため、授業と重なり、学生の参加が少なかったという問題はあったが、ボランティア組織の構成員が参加しやすいということを優先したため、実際に小中学生が来館した場合の解説を出来るようにするための講座という目的は達成できた。

③伝統芸能体験ワークショップに関して

常磐津と狂言の一流の演者を講師として、日本の伝統芸能の所作や発声を地域の小中学生が体験し、本館の所蔵資料の解説を受けることが出来る機会を設けた。参加した小中学生が、日本の伝統芸能に興味を持ち、今後も日本の伝統芸能や歴史に関して積極的に学ぶきっかけとなる効果が期待できる。

受講者に対して行ったアンケートの回答は以下のとおり。

● 講座のおもしろかったところ

受講者全員と一緒に元気に楽しめました。良い経験になりました。実際に声を出して参加できること。全部扇子を使って所作をさせてもらえたこと。善竹十郎先生の笑うと良いことを教えてくれたり、狂言の簡単なことから難しいことまで丁寧に教えてくれたのでよかった。狂言の擬音は印象的でした。気がつけば我を忘れていました。常磐津の斉唱と狂言の擬音の発声が面白かった。

● 講座のおもしろくなかったところ

特になし

● その他の意見・感想

もう一度やってみたいと思いました。雰囲気楽しかったです。博物館で細かい所まで説明してもらって分りやすかったです。日本の伝統音楽についてもっと子どもたちに学んでもらいたい。また、このような企画をお願いします。もっと時間を長くしてください。または、何回かに分けてをお願いします。

④全体として

事業全体を通じて、地域の教育・文化施策を統括する新宿区教育委員会の協力を得ることが出来た。この連携を一過性のものとせず、今後も研究機関としての成果を地域の教育・文化の振興に還元することを重視していきたい。